

阿 仏 房

弘安元年七月二十七日のことである。

阿仏房日得が三度目の身延山参詣をした。大聖人の喜びはひとしおであった。

大聖人は阿仏房に女人の成仏の話をせられた。それは阿仏房の夫人が「女人の罪障はいかがと存じ候へども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候ひしを、万事はたのみまいらせ候いて等云云」（全集一三〇九ページ）という手紙を阿仏房に托して、大聖人の法話頂戴をお願いしたからである。

「阿仏房殿！」

「は、い」

「手紙の御返事は書いて差し上げるが、その前に貴殿に法話をいたしておこう」

「有難う存じます。お聖人のお法話を、私一人で拝聴いたすなぞはもったいないこととございませう」

「貴殿は一人だと申すが、この日蓮が眼からみれば、貴殿の側には夫人の千日尼殿もみえる。国府の尼殿の姿もみえる、いや、佐渡の島の日蓮がお世話になった人々の姿がみえる」

「有難いことでございます」

「貴殿が三度も、あの北国の佐渡の島から、この山中に参詣せられたことは、末代迄も法華經の信者の鑑となるであろう。」

「私も本年で九十歳となりましたが、生きてお聖人さまの顔を拝見することは、これが最後である」と考えております。御法話を下さりませ、お婆々が催促しております」

大聖人は阿仁房の言葉に、にっこりと笑われて次の話をなされた。

「法華經と申す御経はいかなる法門かと申すならば、第五の卷の即身成仏と申すことが一經第一の肝心であります。童女の成仏がこれです。智慧第一と言われた舍利弗が、これを不思議として「童女よ、汝は成仏を得たと思っておるが、このことは信じがたい、何故なれば女人の身は垢れていて成仏の器ではない。成仏の道ははるかなるもので、はかることのできない程の修行をつみ、沢山の戒を持つて然してのちに成仏するものである。しかも猶女人には五つの障りがある。(一)には梵天王となること、(二)には帝釈、(三)には魔王、(四)には転輪聖王、(五)には仏身である。どうして女人が女人が速やかに成仏することができようかと舍利弗が童女に問うたのです。」

すると、童女は、価い三千大千世界の宝珠をもっていたが、これを仏さまに奉つて、舍利弗に問いました。

「我れ今宝珠を奉つた。仏さまのこれを納受せられたことは早いや否や」

舍利弗は答えて、

「はなはだ早し」

童女の曰く、

「汝が神力をもつて我が成仏をみよ、またこれよりも速やかならん」

と法華經の五の卷提婆達多品にあります。

八歳の童女が、現に成仏したことによつて、一切の男子の仏になることをば疑うものはなくなりました。故に法華經は女人成仏の手本として説かれたと申されております。

日本国に法華經の正義を弘通し始めた伝教大師は「能化所化ともに歴劫なし、妙法經力即身成仏す」と言われ、漢土の天台大師は、法華經の正義をよみはじめ給い「他經は但男に記して女に記せず、今經は皆記す」と言われました。これは一代聖教の中には、「法華經第一、法華經の中には女人成仏第一なり」と言われたのであります。

「日蓮は受けがたき人身をうけ、あいがたき仏法にあいたてまつり、しかも一切の仏法の中に法華經にあいたてまつりました。この恩徳は、父母の恩、国主の恩、一切衆生の恩です。父母の恩の中に、慈父をば天にたとえ、慈母をば大地にたとえてあります。その中にも慈母の恩をば報ずることは中々にむずかしい。外典の三墳五典孝經等によって、その恩を報じようとしても、現在をやしなうことのみで後世をたすけるすべはありません。身を養いて魂をたすけずと申すべきです。内典の仏法、五千七百余卷の小乗大乘は、女人の成仏を許さなければ慈母の恩を報じがたと申すべきです。小乗は女人の成仏を一向に許さず、大乘經は或は成仏、或は往生を許すようであるけれど仏の方便の説で事実はない。ただただ法華經ばかりが女人成仏、慈母の恩を報ずる実の報恩經であります。

故に一切衆生の慈母の恩を報ぜんがために、法華經の題目を一切の女人に唱えさせんとの大願をたてたのであります。

然るに日本国の一切の女人は法華經の御心にかなう人は一人もおられません。我が慈母に詮とすべき法華經を唱えないで弥陀を願っております。弥陀念仏は女人を助くる法ではありません。却つて弥陀念仏は無間地獄の業です。父母を殺す人は、其の肉身を破つても、父母を無間地獄にはおとせないことを考えると、弥陀念仏は五逆罪にもすぐれておると言つてもよろしいです。弥陀念仏の小善をもつて法華經の大善をうつは、小善の念仏は大悪の五逆にもすぎると申すべきで

す。

日蓮は法華經にてらして少しもあやまちがありません。日本国の一切の女人をたすけんと願つたこの志は少しも変りません。然るに日蓮は却つて、女人の讒言によつて伊豆の国や佐渡の国に流されたのです。法華經では童女が畜生道の衆生として姿を改めずして即身成仏したのみならず、釈尊の姨母のマカハチャハダイ比丘尼は、一切衆生喜見如来となり、ラゴラの母ヤシユタラ女は眷属の比丘尼五百人とともに具足千万光相如来となり、鬼道の女人十羅刹女も成仏しております。このことを考えれば、殊に女人の御信仰あるべき経は法華經であります。日蓮は弘長四年の八月に慈母のために法華經をよんで、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたことがあります。これも法華經の功德と申すべきであります」

大聖人はここまで語ると、ぽつんと言葉をきつた。

阿仏房は大聖人の言葉がとぎれたので、なつかしげに申し上げた。

「女人成仏の御法話有難く頂戴いたしました、お婆々には私からも申しませう。ですが私は大聖人さまの前に出ますと、いつも慙愧にたえぬ気持ちで一杯です。塚原の三昧堂では、もつたないことでございますが、本当に大聖人さまをあやめる覚悟だったのです」

「その一徹の覚悟が、この身延の山に千里の道も遠しとせずして参詣させたのです。悟れば仏、迷えば凡夫ということでしょう」

「大聖人の背後に刀をもって立ったことを考えると、身の罪の深さが思いやられます」

「阿仏房殿、あなたは自分の考えで、この私をあやめようと思つたと思われでしようが、法華經の經文をもつてこれを見ると、これもみな不思議な仏縁と申すべきです」

「仏縁だと、大聖人さまは申されますか、もつたいないことでもあります、害を加えるものが仏縁とはうけとりがたいことでもあります」

「末代において、この法華經を行ずるものは必らず刀杖の難に逢うとは、法華經の經文にのせるところです、不思議はありません。しかも、その刀杖の難を加えるものが、一度心をひるがえせば、却つてその保護者となる、千日も法華經の行者に食を運ぶ人となる、これもひとえに法華經の功力と言ふべきであります」

「ただ有難いことで、南無妙法蓮華經と唱える外はありません」

「阿仏房殿、塚原の三昧堂では、そなたは私の命をねらつたが、一の谷の阿弥陀堂の廊下では、日蓮の命を助けたではないですか」

「それは大聖人さまの御威徳によるだけでございます。私ごときもの力ではありません」

「あれはたしか文永十年の七月の頃だったなあ」

「さようでございます、大聖人さまの自界叛逆難の予言が的中いたしましたして驚いた幕府が、塚原三昧堂から石田郷の一の谷に大聖人さまを移されてからのことでございます」

「この日蓮を阿弥陀堂に移したのだから幕府の処置もなかなか手がこんでいったのう」

「阿弥陀堂を建立して、田畑までも寄附する程の信心のあついで一の谷の入道のもとに、上人をお移し申したのは、幕府はもしかしたら、弥陀攻撃の説法をゆるめるであろうと秘かに考えていたと思えます、ところが一向にその気配がみえないので、あの襲撃となつたのでございましょう」

「そうであつたらうと思われる」

「勝手な御教書をこしらえて、大聖人さまの面倒をみる者は重罪たるべしとおふれを佐渡中にふれたのでございます。そして阿弥陀堂において大聖人をあやめるとの相談でございましたが、私に知らせる者かおりましてことなきを得ました」

「偽りの御教書のこととは、日蓮も知っておつたが、それがどのような風にして現われるかは、そこ迄は考えず、如何なる形で現われてきても、すべてこれ法華経の仏力と考えていたのです」

「大聖人さまの御威徳によつて、一の谷の入道殿も、表面は念仏者をよそおつていても、ついに内得の信仰をいたすようになったのですから有難いことでございます」

「一の谷の入道殿も、自分の尼殿の内得信仰につられて信心を上げむようになったのであろう。男のしわざは女の力なりと言われるが、入道殿もこの言葉からもれるものではなかつたのです」

大聖人と阿仏房の話は中々つきなかつた。

「故阿仏聖靈は日本国、北海の島のいびすの身なりしかども、後生をおそれて出家して後生を願

いしが、此の人日蓮において法華經を持ち去年の春仏となりぬ。戸陀山の野干は仏法に値いて生をいとひ死を願いて帝釈と生れたり。阿仏上人は濁世の身を厭いて仏になり給いぬ。その子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華經の行者となりて去年七月二日、父の舍利を頸にかけ、一千里の山海を経て、甲州波木井身延山に登りて法華經の道場にこれをおさめ、今年七月一日身延山に登りて慈父の墓を拝見す、子にすぎたる財なし、子にすぎたる財なし。南無妙法蓮華經」(全集一三三二ページ)

と大聖人の御手紙がある。

また創価学会出版の仏教哲学大辞典には、次の如く示されておる。

「阿仏房は大聖人を慕いて八、九十歳の老体にもかかわらず三回も御供養をたづさえて身延へおたづねしておる。大聖人はその純心をほめられて阿仏上人、阿仏上人と呼ばれ、またこの信心から出たお目通りが、現在の「お目通り」の儀式となっている。また阿仏房の純真な信心こそは、現在でも、総本山に参詣する根本精神となっているのである」